

巻頭言

St. Paul's Librarian 29号をお届けいたします。2014年度は、上田修一特別任用教授が着任し、司書課程はリフレッシュした感がありました。特別任用（特任）教授の制度では継続性におのずから限界がありますが、授業の学術的なレベルなどは前の永田治樹特任教授の時代と変わらずに司書課程の運営ができております。しかし、新しい教員との出会いから、関係教職員だけでなく学生たちも、考えること、学ぶことが多かった一年だったと思います。

2014年度の春学期には、陸前高田で再び司書課程が活動することができたのも、嬉しいことでした。これは、陸前高田市立図書館から、本学卒業生の作家であり文化人類学者でもある、上橋菜穂子さんの講演会開催のご希望が聞こえてきたことに端を発したものでした。本誌にも寄稿している本学教務部職員の深野毅が真摯にその希望を受けとめ、各方面との調整に動いて、講演会の実現のめどがついたところに、上橋さんが児童文学のノーベル賞とも言われる国際アンデルセン賞の作家賞を受賞されるというニュースが飛び込んできました。そこで、一昨年（2012年度）に開館した池袋図書館の地下1階の展示コーナーで、受賞記念と陸前高田市立図書館での講演会の広報を兼ねた、上橋さんの人と作品を紹介する展示を司書課程履修中の有志学生で実施することにしました。ボランティアに集まった学生たちの多くが1年生で、大学に入学したばかり。彼/彼女たちにとっては司書課程の科目は「図書館概論」を履修しはじめただけという状況で、上橋さんの作品が大好きでとか、ただ楽しそうだと思ってとか言って手をあげた学生たちが、半ばころからは想像以上の負担にかなり苦しくなったように見えました。しかし、みな、それぞれの可能な範囲で、最後まで責任をもって活動に参加してくれました。教員にもさまざま学ぶところの多い活動でした。この活動の報告を、前述の職員からの報告だけでなく、参加した学生2名からも本誌に寄せてもらいました。

図書館実習の報告は、今号は少しだけ工夫をしました。これまでは、実習館での実習の内容や考察を学生から報告してもらっていましたが、今号では、学外での実習に行く前から行った後までを書いてもらいました。図書館実習事前指導Ⅰにゲストスピーカーとして卒業生の古庄ももさんにいらしていただいたときにも、同様の趣旨でお話いただき、今号にはその記録も掲載することができました。これから実習に出る学生だけでなく、図書館実習を受け入れてくださっている図書館の方がたにも、少しでも参考になればと思っております。

研究報告としては、本学が地域連携先としてお世話になっている埼玉県之久喜図書館長である乙骨敏夫氏から、また兼任講師の折田洋晴先生から、貴重な原稿をお寄せいただきました。さらには大学院生の小出晋之将さんと上田特任教授からも原稿が寄せられました。研究報告の充実にともない、その部分については著者が希望する場合、二段組での掲載を可能とすることと編集方針を改めました。大変、ヴァリエティに富んだ内容です。この場を借りまして、お忙しいみなさまからの本誌へのご寄稿に、心からの感謝を申し上げます。

中村 百合子
(立教大学司書課程主任)